

～異常気象に強いコメづくりの実践～ 適正な田植えと水管理で、初期生育確保！

ここがポイント！！

- 1 田植えは、品種に応じた栽植密度とし、1 株当たり 3～4 本で植える。
- 2 活着までは水深 3～4 cm、活着後は 2～3 cm のやや浅水管理とする。
- 3 除草剤は適期を逃さず散布し、散布後は湛水状態を保つ

1 田植え作業（早植え注意！）

（1）田植え日

- ア 発根・活着を良好にするため、極端な早植えを避けて好天日に田植えをする。
- イ 登熟期間の高温による品質低下を避けるため、コシヒカリの田植えは 5 月 10 日以降を基本とする。突発的な異常高温等による品質低下のリスクを分散する観点から、移植時期の分散を併せて進める。

（2）栽植密度、植え付け本数

- ア 本数を適正に制御し、品質低下を防ぐため、コシヒカリの栽植密度は平坦地で 50 株/坪、山間地で 50～60 株/坪を基準とする。
- イ その他の品種の栽植密度は 50～60 株/坪を基準とし、品種の特性、移植時期や土壌の肥沃度により調節する。
- ウ 過繁茂、細莖化による倒伏や品質低下を避けるため、植え込み本数は 1 株当たり 3～4 本となるよう、掻き取り量を調節する。
- エ 下位分けつの発生を促進するため、植え付け深さは 2～3 cm とする。

2 田植えから中干しまでの水管理

- （1）水温が高いほど発根・活着が早いので漏水を防止し、田植え後は水温の上昇に努める。
- （2）田植え後から活着するまで（田植え後 7～10 日間位）は水深 3～4 cm の保温的管理とする。低温や強風の場合は、植え傷みを避けるため 4～5 cm 程度のやや深水とする。
- （3）下位分けつの発生を促すため、活着後は 2～3 cm のやや浅水とする。
- （4）水を更新する場合は、水温の上昇を図るため早朝にかん水し、日中は止水とする。
- （5）ワキや藻・表層剥離が大量発生する前に、早めに水の入れ替えや夜間落水をする。

3 除草剤の効果を最大限に発揮

- (1) 丁寧な畦塗りや代かきで漏水を防止し、田面を均平にしておく。
- (2) 一発処理剤の使用を基本とする。初期剤を使用する場合は、河川などへの流出を防止するため、田植え前には散布せず、田植え時または田植え後に散布する。
- (3) 処理晩限に近い散布では雑草が残りやすいので、雑草の葉齢をよく確認し、散布適期の範囲で早めの散布を心がける。
- (4) 散布時の水深は3～5 cm 程度を確保する（フロアブル剤、ジャンボ剤及び豆つぶ剤は5～6 cm）。処理後7日間は止水とし、4～5日間は湛水状態を保つ。
- (5) 自然減水により早期に田面が露出する場合は、処理層を壊さないように静かに入水する。
- (6) 農薬使用は製品ラベルに記載されている使用基準や注意事項、使用方法をよく読み、内容を遵守する。



図1 除草剤散布の水管理のイメージ

4 新之助栽培のポイント

- (1) 田植えは稚苗植えて5月中旬頃をめやすとする。
- (2) 適正な生育量に制御するため、栽植密度は50株/坪を基準とする。
- (3) 前年と作付品種の異なるほ場では、漏生籾由来の米が製品に混入しないよう除草剤等による異品種混入防止対策を実施する。
- (4) 葉いもち防除（箱施用または水面施用）は、必ず実施する。

5 農作業での安全対策について

農作業の最盛期となる4月～5月において農作業中の事故が発生することが十分に考えられます。農作業事故が無いよう注意をして、安全な作業を心がけましょう。

また、農作業後、農業機械が道路に落とす泥や土は、自転車や歩行者などの通行を妨げ、交通事故の原因となり大変危険です。道路を汚してしまった場合は速やかに泥の撤去・清掃をお願いします。交通安全と環境美化のため、ご協力下さい。